
シルフローゼの赤い旗

風見 あこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シルフローゼの赤い旗

【Nコード】

N4133I

【作者名】

風見 あこ

【あらすじ】

世界が大帝国に支配された時代。帝国の従属国マールの傭兵・ガジェスは、帝国を倒すために剣をとった。

不思議な力を持つ少女シアに導かれ、ガジェスは世界中の人間たちを変えることを決心する。

伝承「ローゼの乱」

伝承「ローゼの乱」

大陸歴千八百五十八年八月。皇帝ディフリーウス四世に刃を向けた者がいた。

歴史書はその者の真名を伝えぬ。ただ記されているのは、赤毛の傭兵であること。ガザル帝国領の反乱者たちをまとめあげたということ。

帝国の支配から脱しようとする者たちは皆、彼を崇めた。シルフローゼ、と。

——カゼイヤ・オルレイン著『ガザル帝国盛衰記』より抜粋

第一話 流血の叛逆者 ？

1 / 死の牢獄にて

断末魔の叫び声が、石牢じゅうに響きわたる。

彼は鉄格子の隙間から、光の全く差さない回廊の先を見やると、ため息をついた。

——殺られたか。

この収容所に来て半月。その間に何人もの死刑囚が、憎き帝国の者たちによって処刑されていった。

今日の犠牲は、彼の隣の隣の牢に入れられていた囚人だった。故国で有志を募り、帝国軍の宿営地を襲った——というのは、彼の隣の牢に繋がれている男から聞いた噂である。

それが本当なら、と彼は思う。おれは同志の一人を喪ったのだ、と。

「……次はオレの番かもしれないな」

彼が目を伏せて犠牲者の魂に祈ろうとした、そのとき。諦めかけたようなため息とともに、かすれた男の声が隣の牢から聞こえてきた。

「それとも、あんたの番かな。？シルフィ？」

彼は顔だけを声の主の方に向ける。

「……順番からすると、あんたの方が先だろう？ゲイリー？」

？骨？と彼に呼ばれた痩身の男は、そうだな、と乾いた笑いを漏らした。

ここでは生来の名も、身分も、ないも同然である。すべての者が最下層——奴隷以下の者として扱われる場所だ。たとえ元が貴族や王族であったとしても、例外なく罪人の烙印を押されてしまう。彼も名を名乗ることは許されなかったし、それ以前に必要ではなかった。

名を持たない囚人たちは、互いの持つ特徴になぞらえて呼び名を作る。彼も燃えるような赤毛をしているから、という理由で？シルフィ？——？血まみれ？と呼ばれているにすぎなかった。

「それもそうだな。……もうオレの左隣の部屋はどこも空いちやいねえ。次はやっぱり、俺の番だ」

ゲイリーは骸骨のような顎を、くつくと鳴らす。かるうじて粗末な食事がでるものの、それは成人男子が必要としている量には足りなかった。彼がここへ来た半月前は、ゲイリーにももう少し肉がついていたはずである。鍛えられた肉体を持つ彼も、栄養不足に悩まされていた。

だがそれも、死んでしまえば関係なくなるのかもしれない。

——もし、ゲイリーが殺されたら。その次こそは、おれの番だ。

これまで処刑は最も左の牢に入れられている囚人から行われてきた。彼はゲイリーの隣の牢を見やる。先ほど処刑された死刑囚の部屋だったそこには、何一つとしてなかった。その隣も、そのまた隣も同様で、もぬけの殻である。

罪が重い順だ、と彼は考えていた。

彼がこの牢へ繋がれたとき、看守は彼をここまで連れてきた帝国の者に尋ねたのだ。この者は何の罪を犯したのか、と。

その答えが最悪でなく、そしてまた良でなかったため、今日まで彼はこの牢獄で生き延びてきたのだ。武器を奪われ、両手を鎖に繋がれたまま。

彼とともに収容された仲間、もはやこの世にいない。先陣を切って敵の元へ飛び出した仲間たちは、君主に逆らった極悪犯罪人として、彼よりも左側の牢へ繋がれた。そして、殺された。

「？シルフィ？さんの次は、おいらかあ……」

彼の右隣の囚人がつぶやく。声変わり前の、まだ幼い少年の声は冷たい牢獄には不似合いだった。

「おいら、死んだら父ちゃんや母ちゃんのところへ行けるのかなあ」「分からないよ？ だってぼくたち、悪者じゃないか」

そう言ったのは、そのまた右隣に繋がれた少年である。どう見ても十に満たない体つきであった。

彼より右の牢にいる者は、たいていが子供なのだという。腹をすかせるあまりに帝国の兵糧を奪ったのだと、本人たちから聞いた。

——お前たちは悪者なんかじゃない。

彼はそう思ったが、口にしなかった。言っただうなることでもない。今ここで、帝国が犯してきた数々の悪事を並べ立てたところで、彼を含む囚人たちが解放されるわけがなかった。

「……悔しいよな」

ゲイリーがつぶやく。

「オレたちの言い分は正当なのによ。こうして殺されなくちゃなんねえなんてさ」

こう言ってられるのも今日だけさ。

ゲイリーの言葉に彼はいたたまれなくなり、そつと目を閉じた。

何もすることがない牢の中では、眠って最期のをときを待つことしかできない。

「放せっ！」

悲痛な金切り声で、彼は目を覚ました。

「やめろっ……やめてくれっ……」

左隣の牢の鉄格子が開けられ、帝国の軍服を着た男たちが瘦せ細った男を取り押さえているところであった。

ゲイリーは鎖から外された足をばたつかせ、必死に抵抗している。しかし長い間拘束されていたゲイリーが、鍛えぬかれた軍人に敵うはずもない。あつという間にゲイリーは動きを封じられ、羽交い締めになられてしまった。

縛られた痕がくつきりと残った手首が、だらりと垂れる。

「……お願いだ……頼むから、オレを殺さないでくれっ……！」

蚊の鳴くような声でゲイリーは懇願するが、誰一人として聞き入れる者はない。黙ってゲイリーの腕を後ろへ回し、手錠をかける。

「おっ、おい……！ オレは死にたくないんだ！ やめろっ！」

引きずられるようにゲイリーは牢から出され、暗い廊下の奥へと消えていく。やめろ、という声だけが、今もまだ牢に繋がれている彼の耳へ届いた。

生にすぎりつこうとしているゲイリーの声は、彼の記憶を呼び覚ます。

——俺たちは生きなくちゃならないんだ。

——俺は生きたい！

かつての仲間たちのものと、ゲイリーの声が重なった。くそ、と口の中だけで小さく毒づいて、彼は唇を噛みしめる。

一瞬だけ、時間が止まった。

そう彼が感じた次の瞬間、思わず耳を塞ぎたくなるような叫び声が監獄に轟く。

聞きたくなくても、ゲイリーの絶命の声は容赦なく彼の耳を貫いた。

体が小刻みに震える。死にたくない、とそのとき彼は初めて、死に恐怖をおぼえた。震えを止めたくとも両手は鎖に繋がれていて、自分自身の体を抱くことすらできない。

先ほどのことが嘘のように、地下牢は静まり返っている。

明日は、俺の番だ——。

明日の今頃には、自分も左の牢の囚人たちと同じ道をたどることになるのだろう。彼は確信していた。この監獄に、例外などない。それ以前に自分は？ 例外？ になれる人間ではない。

「……？ シルフィ？ さん。死にたくない？」

彼の異変に気づいたのだろうか、右隣の少年が様子をうかがいながら尋ねてきた。

「なぜ、そう思う」

彼は声が震えてしまわないように、低い声で言う。

「俺はもう、死ぬしかねーんだよ」

「でも、だって」

少年は言葉にすることをためらったようだ。唯一自由な首を動かして、彼が促す視線を送ると、少年は慌てて続ける。彼の顔をまっすぐに見て。

「泣いてる」

「は？」

「？シルフィ？さん。涙が出てる」

その言葉に、彼ははっとした。手で確かめることができないので、首をひねって頬を肩にこすりつける。

「……本当だ」

薄い囚人服が湿っていくのを肌で感じた。

「そうか」

鼻の奥に、戦の中では感じたことのない痛みがある。久しぶりすぎるその感覚に、彼は子供の前であるということを忘れた。

「……生きてえよ、俺は。ああ。俺は生きたい」

先ほどより張りのある声に、嗚咽がまじる。石の床に水滴が落ち、丸い跡をつくる。

「おいらだって」

少年もそれにつられたのか、鼻をすすって言った。

「おいらだって生きたい。こんなところで死にたくないよ」

離れたところで鳴き声があがる。いつの間にか涙が、牢獄内に伝わっていた。至るところから、生を渴望する声が聞こえてくる。

「……はは、俺のせいだな」

彼は涙を流しながら、苦笑した。

「俺のせいでうるさくなっちゃった」

今まで処刑される人間の叫び声を聞いたことはあっても、囚人たちが涙する声は耳にしたことがなかった。皆が絶望に打ちひしがれ

ていたせいだろう。？死の牢獄？——イル・アデスに入れられたが最後、誰も逃れられない。皆がそう知っていたから、誰一人として抗おうとしなかった。

「最高だぜ。泣いて、俺の死を悼んでくれるなんてよ」

「……？シルフィ？さん」

「俺も精一杯、それに応えてやる」

彼は、できるかぎりの笑顔を作ってみせる。

「お前たちは、生きる」

ガチャリという鍵を開ける音とともに、目の前の格子戸が開けられる。

覚悟は決まっていた。彼はおとなしく、されるがままに牢を出る。体の後ろで縛られてしまった手は、使い物にならない。手錠を壊す武器もない。となると、どうしたらいいか。彼は目だけを動かし、周りの様子をさぐった。

彼を捕らえているのは、いかにも軍人といった屈強な男が二人。明かりを持って先導する男が一人。背後にもう一人いるようだが、さすがに後ろを振り返ることはできなかった。

——これくらいなら。

さいわい、男たちは皆それぞれに帯剣している。もしものことがあった場合、その剣はすぐに抜かれることだろう。

（武器さえあれば）

彼は内に秘めた考えを悟られないように、暗い廊下を進んだ。

処刑場に出るまでは、と彼は考えていた。それまでは決して動いてはならない、と。

暗かった道がしだいにひらけ、明るくなる。久しぶりの日の光に、

彼は目を細めた。

彼の足もとに長く大きな影が伸びてくる。彼を待ちかまえる斬首台は、そのせいか倍以上に大きく見えた。巨大な刃が首に落ちてきたら、ひとたまりもないだろう。

彼は静かに目をつむった。

自分でも驚くくらい、彼は落ち着いていた。これから死ぬのだというのに、恐れはなかった。

——たとえ今日、ここで命が尽きるとしても。

彼はゆっくりと目を開ける。

——俺は最期まで……！

勢いよく体をよじって、両脇を押さえている男たちを振り払う。そのときだった。

「マールのガジェス・ロイド」

低い女の声が、背後から聞こえた。彼が後ろを振り返ると同時に、拘束されていた両手が自由になる。

彼を含め、その場にいた者たちは何が起こったのか理解し得なかった。

音をたてて、彼の腕を束縛していた鎖が地面に落ちる。

彼の前にいたのは、この牢獄に存在するはずがない者だった。

帝国軍が女人禁制というのは、周知の事実である。それなのに、彼女？はこのイル・アデスの中に立っていた。

黒髪の少女は、手にしていた剣を彼の方に投げて言う。

「私とともに来い——ガジェス」

第一話 流血の叛逆者？

2 / 鎖からの解放

私とともに来い——。

その言葉を彼は、すぐには呑み込めなかった。体だけが反応した。長い間、傭兵として生きてきたのだ。考えるより先に手が出た。

彼——ガジエスは、少女が投げた剣を宙でつかむ。つかみ取って、ガジエスははつとした。

（なんだ、この剣は）

ものごころつく前から剣には慣れ親しんできたが、ここまで自分の手に合う剣はなかった。ここに捕らえられるまで愛用していたものより、その剣はガジエスの手にぴったりと馴染んだ。

赤褐色の柄、刀身は幅広で長い。よほどの腕自慢でなければ扱えそうもない重さである。半月以上牢に閉じ込められていたガジエスだが、腕力はあまり衰えていなかった。

試すつもりで、一度剣で空を薙ぐ。あまりの心地よさに、戦士の血が騒いだ。

——これなら、いける。

「お前は、おれの味方か？」

ガジエスは目の前の少女に問う。

肩の上で切りそろえられた黒髪は、女にしては短い。長い睫毛が深い青の瞳に影を落としている。白磁のごとき肌に形のよい唇——彼女は、このような血なまぐさい場所には似合わない、まごうことなく美少女だった。美的審美眼を持ち合わせているとはいえないガジエスも、ただただ、美しいと思う。

「私は」

「貴様、諜報員だったのか！」

少女が答えるより先に、それまで呆然としていた帝国の者たちが声を荒げた。

「この売国奴め！ 皆の者っ、こやつらを捕えろ！」

リーダー格らしき男の呼びかけをきっかけに、軍人たちは一斉に剣を抜く。

「皇帝に顔向けできぬ、殺せ！」

いくつもの刃がガジェスと少女に向かって襲いかかってくる。

くそ。ガジェスは舌打ちして、少女から渡された剣を思い切り振るった。巨大な刃は、一瞬にして辺りを赤く染める。

「……？シルフィ？」

少女がぼそりとつぶやいた。襲われているというのに、慌てたようすが微塵も感じ取れない。

「お前、この剣をどこで手に入れたっ！」

ガジェスは剣をふるいながら、少女に問うた。その間も彼の剣は、迫りくる敵を葬り去る。

赤毛の囚人は、敵を殺すことをためらわなかった。自分が生き残るために、敵を倒す。戦場で培われた経験が、ガジェスを動かしていた。返り血がかかるのも構わず、ガジェスは剣を振るう。

これほどよく切れる剣を、ガジェスは知らなかった。人の——自分と同じ種族の者を切っているというのに、気持ちがいい。ガジェスの体に伝わるのは、肉を斬る鈍く不快な感覚ではなく、まるで自分が風を意のままに操っているかのような心地よさだけだった。

それは危ない感覚だ、とガジェスと思う。

だが、彼は剣を振るうことをやめられない。

「それは、きみのための剣」

戦うガジェスの背後で、少女が小さく息をつく。

「きみだけのために作らせた——の剣」

肝心な部分が、ガジェスには聞こえなかった。聞き返そうとしたら、少女に腕を掴まれる。

「おい、お前……！」

「私はきみに、人殺しをするためにそれを渡したわけではない」
少女の青い目が鋭く光った。

「まずはここから逃げることだ」
どうやって、とガジェスが聞く暇はなかった。少女はガジェスの腕をつかんだまま、低い声でどこの国のものなのか分からない言葉をつぶやく。

——呪文か？

ガジェスがその考えに至ったときにはもう、辺りの風景が変わっていた。

なぜおれを助けた、とガジェスが問うと、少女は首を横に振った。
「助けたわけではない」

十七、八くらいに見える少女だが、その言葉づかいは年も年齢も相応ではない。年上の男と話している気分だ、とガジェスは思った。少なくとも二十三のガジェスを、年上として敬う気配はない。

誰もいない森の中で、妙齢の女性と二人きりになったら。彼は黒髪少女を横目で見やる。

襲いかかりたくなるのが普通なのだが、不思議とガジェスの中にそういった欲望は湧いてこなかった。相手は文句なしの美少女だというのに。こんな機会はめったにないというのに。

整った少女の横顔を眺めていると、欲情よりむしろ——なぜだろうか、闘争心が湧いてくるのだ。何に対してなのかは分からないが、ガジェスは剣を振るいたくなる衝動に駆られていた。

それを抑えるために、ガジェスは拳を握る。辺りの森の緑を見て、心を落ち着かせようと深く息を吸う。

イル・アデスから？飛んだ？ガジェスたちは、かの牢獄がある帝

国領ククル島の森を歩いていた。すぐ近くに飛んだ、と少女は言ったが、あの忌々しい牢獄の姿は少しも見えてこない。

島に来てすぐに捕らえられたガジエスにここの地理が分かるはずもなく、少女について行くこと以外に選択肢はなかった。

「……おれに何を望む」

女にしては少女の歩く速度ははやい。歩幅を合わせながら、ガジエスは尋ねた。

「なぜ、おれを選んだ」

「ん。なんとなく」

「は？」

想像もしていなかった返答に、ガジエスは耳を疑う。

「お前、『なんとなく』でこんなことをしたのか？」

少女は眉ひとつ動かさない。処刑場で出会ったときと、まったく表情が変わっていないかった。

「なんとなく——」

無表情のまま、少女は肩をすくめる。

「——と言ったら、きみは怒るだろうか。そう続けようと思っていた」

思ったより単純な男だな、きみは。少女の言葉に、ガジエスは舌打ちした。まったく彼女の言うとおりであった。肯定されていたら激昂していただろう、と自分自身を顧みる。

「たしかにおれは、単純だけだよ」

「だが、馬鹿ではない」

そこが重要なのだ、と少女は言った。

「私に借りができただろう、ガジエス？」

助けたわけではないと彼女は言ったが、彼女のおかげでガジエスが処刑台にかけられなかったのは事実である。彼女に助けられたも同然ではないか。そのとおりだ、とガジエスはうなずく。

「自尊心の低い男だな——まあいい。きみが私に借りを返してくれれば」

「どうやって？」

「だから言っただろう。私とともに来い、と」

——私とともに来い。

ガジェスは先程の少女の言葉を思い出す。

「……おれなんかが力になれるか？」

「なれる。私が言うのだから間違いない」

少女ははっきりと言った。

「分かった。分かったけどよ」

何をそれほど期待されているのだろうか。分からないガジェスは、少女に問う。

「お前はいつたい……誰なんだ？」

シア、とだけ少女は答えた。しばらく待ってみても、彼女の口から新たな言葉が紡ぎだされることはなかった。

シア。それがこの少女の名前なのだろうか。一族や役職の名前ではないとガジェスと思う。『シア』はごくありふれた、女性の愛称だ。

（本名を教えるつもりはないというのか）

「シア」

ガジェスが呼ぶと、少女は「何だ？」と首をかしげた。

「お前について行ってもいい。だが、その前にひとつだけ俺の役目を果たさせてくれ」

何を、とシアは聞かない。分かっている、とだけ言う。

「だから私たちは、イル・アデスに向かっているのではないか」

第一話 流血の叛逆者？

3 / 導きの光

イル・アデスは絶海の孤島に作られた、死刑囚を収容する施設である。

四方を高い壁で囲み、中は地図がなければ迷ってしまうほど入り組んだ迷路のような作りになっている。中央の処刑場では毎日のように処刑が行われ、囚人たちは見せ物のように衆人監視的となり、無惨な方法で殺されていく。

？死の牢獄？の名の通り、一度入れられたが最後、生きては外に出られないところだ。

——俺たちの同志を助け出さなきゃならねえ。

——こんなところで殺されていいやつじゃない。

ガジエスの仲間たちは皆、声高に叫んでイル・アデスに突っ込んでいった。看守や軍人たちを次々に倒し、同志が捕らえられている獄舎へと向かっていき、そして。

彼らはとうとう、牢を見つけたすことはかなわなかったのだ。

二十人ほどいた仲間のいずれもが、迷宮の闇に呑み込まれ、あつけなく敵の手に墜ちた。どんな道を通っても、辿り着けない。ガジエスも例外ではなかった。

同じ時期に牢獄があるククル島内で反乱が起き、首謀者だけでなく、加勢した者たちがすべて捕らえられガジエスたちと同じように牢に繋がれた。老人も子供も関係ない。妙齢の女たちは帝国軍の男らに弄ばれ、いたぶられ、拳句の果てになぶり殺された——というのは、詮索好きの？ゲイリー？から得た情報である。

帝国のどんなに身分が高い者であろうと、女なら絶対にこの牢獄へ足を踏み入れることは許されないはずだった。処刑が毎日行われる穢れた場所。女は清らかであれ。それが帝国のしきたりなのだから。

ら、すすんで入りたがる者もないだろう。看守の中に女が紛れ込んでいたなど、ガジエスには信じられなかった。

「お前、血が怖くないのか？」

隣を歩くシアは首を横に振る。

「もう、慣れた」

「綺麗な顔して、実はどっかの国の凄腕暗殺者だったりしてな」

「そうだが」

冗談のつもりで言ったのだが、あっさりと肯定されてしまい、ガジエスは返答に窮した。

「げ。マジかよ……」

「ん？ 冗談だ、冗談」

シアは手をひらひらと振ってみせる。が、今の「冗談」は冗談に聞こえなかった。ガジエスはそう感じた。

（とりあえず、まともな女でないことだけは確かだ）

これ以上何か尋ねても彼女が正直に答えることはないだろうと思い、彼は口をつぐむ。ガジエスが黙ると、急に辺りがしんと静まり返った。ガジエスとシアの足音だけが、やけに大きく聞こえる。

いくら歩いても目的地は見えてこない。迷ったのではないか。ガジエスは弱気になる自分をなんとか抑え込み、小さく息をついた。吐き出された白い気体が、周りの白になじむ。

白。

霧だとガジエスが気づいたときにはもう、体が白いもやに取り囲まれていた。

「なんだ、突然……」

前を見る、とシアが指をさす。言われたとおりに、シアの指差した先をガジエスは目を凝らして見る。深い霧の中に巨大な影が浮かび上がる。

「イル・アデス」

シアがつぶやく。

ガジエスはただただ目を見開き、目の前の光景に圧倒されていた。

「これが、イル・アデスの真実の姿」

半月前に俺が見たのとは違う――。彼は驚きのあまり、声が出せなかった。

記憶の中の牢獄と目の前に立ちはだかるものとは、大きさといい、形といい、全く違う。前者がただ牢獄として作られたものに対し、後者は。

「要塞……」

戦闘のために作られたもの。

「前にきみが見たものは全て幻影だ。帝国は術を使って、これを小さな牢獄のように見せかけていただけなのだ」

だから迷うのも当然だとシアは言う。

「じゃあ、なんで今はこうやって見えるんだ？」

おそらく帝国は、各国に勘付かれないように深い森の中に要塞を隠したのだろう。？術？を使える彼らなら可能だ。幻の術が存在するという噂はガジェスも聞いたことがあったが、実際に目にしたことはなかった。ククル島のような、帝国領から離れた孤島にさえも？術？の力が浸透しているのか――。ガジェスは気が遠くなるのを感じた。

いずれにせよ？術？に対抗できるのは？術？のみ。

「シア。お前が幻を……」

シアは答えなかった。ガジェスに一瞥をくると、さっさと要塞の中に入って行ってしまふ。

「お、おい！ 何も考えずに入るなよ！」

「大丈夫だ。何のために、私がここに半月もいたと思っているのだ？ ここの仕組みくらい、もう頭に入っている」

冗談ではなさそうだった。無機質な声であったが、なぜか自信に満ちて聞こえた。肩をすくめて、ガジェスはシアのあとに続く。

「なあシア。お前さつき、移動する術を使ってただろ？ あれで目的のところまで一気に飛べばいいじゃねえか」

「いくら何でも、囚人全員をあの術で逃がすことはできない。準備

「が必要だ——？仲間？たちを助け出すには」

たとえば、とシアは言った。

「数千の兵士の始末とか」

「まさか……さっきのあれで、すごい騒ぎになってるんじゃないだろうな……？」

処刑されるべき囚人が暴れまわり、間諜の？女？とともに？術？を使って逃げたとくれば、帝国軍が慌てるのは必至だ。次に備えて警戒するに違いない。

「それは想定していた。むしろそれを狙った。心配するな、ガジェス」

そう言ったシアの背中が、ガジェスの目にはまぶしく映った。今から自分たちがしようとしているのは、神の教えに背くことのはずであるのに。少女は、世界を創った女神のように見えた。

「あなたは……！」

シルフィさん、と言いかけた少年を、ガジェスは人さし指を口元にあてて黙らせる。

「静かにしていてくれ。見つかったら大変なことになる」

無理に厳めしい声を取り繕ったものの、内心ガジェスは安堵していた。自分の隣の牢に繋がれていた少年が生きていた——自分のあと、処刑は行われなかったのだ。ガジェスが牢から出されたときから、まだ数時間しか経過していない。処刑どころではなかったのだろうか。

仲間たちが生きていたということが、ガジェスを奮い立たせる。

待っているよと声をかけると、囚人たちがざわめきだした。

「なんだって？ここから出してくれるのか？」

「ああ。だから黙っていてくれ。絶対に出してやるから」

「待て、ガジェス」

鎖に繋がれた者たちを見回していたシアが、片手で制す。

「お前は……？」

「いいか——よく聞け」

シアの声は低めだがよく通る。それまで騒いでいた囚人たちは、さつと口を閉じた。

「お前たちを出してやってもいい。だが少しばかり条件がある」

「条件？ そんな話は聞いてないぞ」

「きみも聞いていれば分かる」

語りだしたシアに、皆静かに耳を傾ける。何だよ、と思ったガジェスだが、彼女の話聞いた瞬間、自分の耳を疑った。

（マジかよ……）

他の者たちの反応も同様だった。しかし、異を唱える者は誰一人としていなかった。生きる希望を失っていた囚人たちは、目を輝かせてうなずく。

「分かった、やろう！」

第一話 流血の叛逆者？

4 / 交わされた誓い

後頭部に激痛がはしる。起きろ、という声でジーク・ハロウドは自分が眠っていたことに気がついた。

顔を上げると、眉をつりあげた同僚と目が合った。彼の握りしめられた拳が震えている。こいつに殴られたのかという考えにいたる前に、もう一発拳が落ちてきた。

「痛いじゃないか、メリアス」

「さっさと起きろ。仕事中の居眠りは厳罰だ」

「げっ。うそ、俺、当番だったっけ」

背の高い金髪の男、メリアスがうなずく。眉間にしわをよせて、
「通常なら」とつけたした。

「通常ならお前は一週間の独房入りだ！　だが今は非常事態、さっさと剣を持って持ち場につけ」

「非常事態って……まさか侵入者か？」

ジークが尋ねると、端整なメリアスの顔がさらに険しくなる。

「侵入者だけならいい。だが」

視線だけで彼は兵舎の外を指し示した。武装した兵士たちが、慌ただしく駆け回っている。

「囚人どもが逃げた。あの封印を破ってだ」

「へえ、やるじゃないか」

「へえ、で済む話ではない。全員だ、全員！　俺たちが気づいたときには、もう誰もいなかった」

「誰も気づかなかったのか？　普通なら気づくだろう」

「だから、非常事態だと言っている！」

メリアスは非常に怒っているようだった。何ごとも完璧でないと

すまない彼のことだ。逃げられたことが許せないのだろう、とジークは思う。

士官学校を出てここに配属されたメリアスと、食いぶちを稼ぐために仕方なく軍に入ったジークとでは仕事に対する熱意が違う。二十三という年齢、金髪碧眼であること、同じ中流階級の出であること以外は、全てが異なっている。

大きく伸びをして、ジークは仕事熱心な同僚に尋ねた。

「で、どうしてそんなことになったんだい」

「……睡眠薬を食事に混ぜられた。それだけではない。睡眠の術までかけられていたらしい」

「なかなかのやり手だなあ。こりゃいつか、ウチの將軍様と張り合えるかもしれないな、うん」

大きくあくびをすると、メリアスににらまれる。

「だって今さら慌てたつてさ。どうせもう逃げられたんだろう？」

「どうしようもないじゃないか」

悔しいことにそうだ、とメリアスは吐き出すように言った。

「囚人たちはもう島を出てしまった」

こんなにうまくいくななんて思ってもみなかった。

目の前に広がる大海を見つめ、ガジェスは息をついた。手際が良すぎる、と黒髪の少女に視線を移す。いつの間に用意されていたのか、巨大な木造船が泊められていた。逃げ出してきた囚人全員が乗り込める大きさである。

「シア。お前、最初からあいつらを……」

「何のことだ。私はきみの望みをかなえただけではないか」

少女はしらばくれると、背後にいた逃亡者たちに船に乗るよう手

招きした。ぼろぼろの囚人服をまとった者たちが一気に押し寄せてくる。

帝国に捕らえられた仲間を救おうとした者たち。帝国の支配から脱しようと武器を取った者たち。盗むことでしか生き延びることができなかった孤児たち。イル・アデスに繋がれていた者たちの誰もが、この島から出ることを決心したのだ。

「きみはどうする？」

全員が乗り込んだのを確認したシアが尋ねてくる。

「私たちと一緒に行くか？ それとも、ここに残るのか？」

ともに来い、と彼女は言ったのだ。だが、しかし。

「おれは」

行かない——と言いかけて、ガジェスは口をつぐんだ。

自分をまっすぐ見つめてくるシアを見、彼女から与えられた大剣を見、そして地に視線を落とす。

——俺たちの意志を継いでくれ。

故郷の仲間たちの言葉がよみがえってくる。

（俺は、あの約束を守らなきゃなんねえ）

——お兄ちゃん。絶対、無事に帰ってきて。

目を閉じると、故郷に残してきた小さな少女の姿が浮かぶ。仲間たちとの約束も大切だが、たった一人の肉親の願いも忘れてはならない。

「シア。おれにはやるべきことがある」

ガジェスはゆっくりと、噛みしめるように言った。

「おれは、どうしても帝国を倒さなければならぬ」

「……そうか」

シアは眉ひとつ動かさない。ガジェスがとてつもなく無謀なことを口に出しているというのに。

「ガザル帝国を倒し、祖国を独立させる。だから、お前たちとともに行くことは——」

「やはりそうか」

ガジェスの言葉を遮って、シアは彼の肩に手を置いた。

「それなら、私たちは同志だ」

それは、思いもかけなかった言葉であった。

「冗談だろ、シア」

「冗談ではない。私の使命は皇帝を殺すことだ」

皇帝を殺す——十代の少女から発せられるにはあまりに物騒すぎる。だが深い青の瞳を見る限り、それは子供の戯言とは思えなかった。

シアは本気で皇帝暗殺を考えている。ガジェスは直感した。

「お前、？術？をどこで身につけた」

答えはガジェスの予想した通りであった。

「帝国で、だ」

「それなのに、なぜ帝国に反旗を翻す？」

「術者として、皇帝の存在は放っておけない」

それ以上シアは言わなかった。

「どうする、ガジェス？」

ただガジェスに問う。

「私とともに来ないか？ 私にはきみが必要だ。……そして私は、きみの力になれる」

私たちは同志だ——。

「おれは」

ガジェスはふつと笑って、青い目を細めた。

「まあ、この剣ももらったことだしな」

だんだんおかしくなってきた、ガジェスは噴き出す。

（仕組まれたぜ、まったく！）

あらかじめあの要塞に入り込み睡眠薬を盛って、脱出用の出入り口を見つけたしておく。島から出るための船も用意して。用意周到なシアのことだ、とガジェスと思う。

「分かったぜ。協力する」

結局おれがこう答えなくてはならないことを、シアは分かっていた。

たんだ――。

「よかった」

出会って初めて、シアがわずかにほほ笑んだ。ような気がした。
「追い続けてきた甲斐があったものだ。きみが捕らえられたときはどうしようかと思ったが」

すぐに彼女は無表情に戻る。

「私たちならやれる。シルフローゼ」

「？流血の叛逆者？？　もしかして、おれのことじゃないだろうか？」

シアはうなずく。そしてどこからともなく、巨大な赤旗を取り出した。上等な生地で作られた、立派な旗だ。

「この旗を王城に立てるのはきみだ、ガジェス・ロイド」

赤い旗。それは反乱軍を表す色。そしてガジェスの髪と同じ色。

「私、シア・バーティはきみのために全力を尽くす。すべての力をきみに捧げると誓おう」

シアはガジェスに旗を押しつける。反射的に受け取ってしまったガジェスは、そのあまりの重さに目を見開いた。

彼女は片手で持っていたが、この重さは成年男子のガジェスが両手でようやく支えきれるものだ。なぜ、と考え、シアが術を使ったのだと思いいたる。いくら何でもあの細い腕で旗や、あの剣を持っているはずがないのだ。

（力強いぜ、こりゃ）

ガジェスは両手で赤旗を持ち上げる。

――シルフ・ローゼ。

なってやろうじゃないか、とガジェスは思った。どんなに敵の攻撃を受けようとも、絶対に約束は守りとおしてみせる。

言葉にできなかったが、シアには分かったようだった。分かってもらえたような気がした。

ガジェスの思いを受け、赤い旗は空にはためいていた。

第二話 荒野の星？

1 / 若き獅子

アルディア王国の春は短い。雪だけが終わったかと思うとすぐに、湿っぽい梅雨の季節に入る。

「ライセルさま。もう行ってしまうわね、ですね」

バルコニーから身を乗り出し、庭を眺めていた少女がつぶやいた。穏やかな風が、ライセルに背を向けた少女の金髪を軽やかにさらっていく。彼女の細い毛は日の光を受け、透明な糸のように輝いた。ほづ、とライセルは感嘆の声を漏らす。

「君はどんな美しくなるね、エミリア」

「……エミリーです、ライセルさま。わたくしはお世辞なんかより、あなたが欲しい」

愛称を呼べとせがむ五歳年下の婚約者を、ライセルは愛おしく思った。普段なら滅多に言わないわがママがこの上なくいじらしく感じられて、彼はそつと彼女に歩み寄り、小さな肩を抱き寄せる。

エミリアの真っ白な肌に、急に赤みがさした。嘘です、と消えてしまいそうな声でつぶやく横顔に、ライセルは目を奪われる。

やはり、彼女はきれいになった。

従兄妹同士ということもあって、エミリアのことは幼いころから知っている。人形遊びが大好きな子供だった。生まれたときから立派な淑女となるように育てられたエミリアだが、不満ひとつ言わずにライセルを慕ってくれた。

彼女は、この屋敷の庭で人形遊びをすることを好んだ。とくに彼女のお気に入りだったのが今の季節——春のあたたかい日ざしの中でやる、騎士の恋物語である。

戦争を終え帰ってきた騎士が花畑で、愛する王女に求婚するといった、少女なら誰もが憧れそうな物語だ。アルディアに伝わるおと

ぎ話なのだが、エミリアは人一倍にその物語に恋焦がれていた。

エミリアが王女役、人形遊びに付き合わされるライセルは決まって騎士役であった。物語が終わるたびに、エミリアはもう一度やることをせがんだ。

そんなエミリアが人形遊びをしなくなって、もう五年。子供の遊びから卒業した彼女は、年頃の他の娘たちと同じように舞踏会に参加するようになった。

舞踏会は貴族たちの社交の場。互いの腹をさぐり合う者たちの巢窟だ。当然、アルディアーの名家に嫁ぐことになっているエミリアは、常にたくさんの目から観察され続ける。女性としての価値はどれほどなのか、オルレイン家にふさわしい娘なのか。エミリアの行動や言動のひとつひとつを、貴族たちは逃さない。

貴族社会とは息苦しいところだ、とライセルはしばしば思う。

「エミリー。ぼくがいない間は、どこの舞踏会にも出る必要はないよ」

自分がいるときは、どんな中傷からもエミリアを守る。しかしそうでないとき、エミリアは盾を失ったかよわい少女にすぎない。

「君が、心配なんだ」

年を重ねることに美しくなるエミリア。それと同時に、彼女への愛おしさが強くなる。

「……わたくしは」

ライセルの腕の中で、小さな体がぴくりと動いた。

「エミリー？」

「わたくしは、あなたのことが心配なのです」

エミリアは顔を上げ、まっすぐにライセルを見つめてくる。

「あなたがこのまま、どこかへ行ってしまうのではないか……わたくしは、とても心配です」

「馬鹿言っんじゃないよ、エミリー。王女の騎士は必ず帰ってきただろう？」

ええ、と恋人はうなずいた。エミリアの顔が少し動いた隙に、ラ

イセルはさつと抱擁を解く。

「必ず帰ってくるよ。そうだな、来年のこの季節までには。そのときにはばくも、きみに花を捧げると誓おう」

エミリアは目をこれ以上もないほど大きく見開いた。それから、火照った顔を隠すようにうつむいてしまう。

「じゃあ、ばくは行くよ」

これ以上エミリアのもとにいたら決心が鈍ってしまいそうで、ライセルはわざと冷静をよそおい、恋人に背を向ける。

部屋の扉に手をかけたとき、ドレスの裾が翻る音がした。

「……ずっと、待っています！」

ライセルは振り向かなかった。片手だけあげて、それにこたえる。――エミリアは知らない。

この出立は普段のものとは大きく違っている。無事に帰ってこられる保証はない。

だがライセルには、そのことを恋人に告げるつもりはなかった。

「元気で、エミリー」

若き次期公爵が姿を見せると、王宮の前に待機していた兵士たちは一斉に表情を引き締め、敬礼をした。

「ライセルどの、こちらはいつでも出発可能です！」

四十ほどの精悍なひとりの男が進み出る。アルディア軍大佐である彼は、一個中隊を従えてライセル・オルレインに付き添うことになっていた。まさかの事態のために彼らは招集されたわけだが、いくらなんでもたかが地方反乱者との対談をするだけにこの人数は多すぎる。

いくさを持ちかけているようなものではないか、と大佐は内心思っていた。

（陛下は何をお考えになっているのだから）

隣国ガザルの干渉に対抗しなければならぬというのに、国内で面倒事が起こってしまったらどうするつもりなのだろうか。

昨年崩御した先王から王位を継いだばかりの王は、大佐でしかない彼から見ても明らかに無能だった。

国政を実質取り仕切るのは大臣であつて、国王はただの飾りにすぎない。だが、今回の会談の場をもうけさせたのは他ならぬアルディア王、シュルスだという。

「……あなたは、この会談が不満ですか？」

思っていることが顔に出てしまったのかもしれない。

「いえ、そのようなことはございません」

ライセルに尋ねられ、大佐は慌てて取りつくろつた。

「いいですよ。正直、ぼくもそう思いますから」

オルレイン家は王族の血を受け継いでいるものの、ライセルはまだ王政の中心部とはほど遠い場所にいる。爵位をもたない彼が、なぜ今回の使者に任命されたのか。それはまったくの疑問である。

「たぶん、帝国のせいでしょうけどね」

ライセルの言葉に、大佐ははつとした。

「帝国にでも脅されたんでしょう。最近、ますます干渉が激しくなっていますから」

「ら、ライセル殿……」

帝国の間諜がいつどこで聞いているかしのれない状況だ。だが、ライセルは気にもとめない。冗談ですよ、と次期公爵は笑って流したが、大佐は生きた心地がしなかった。

もう、冗談ではなくなりつつあるのだ。

ガザル帝国はアルディア王国を侵略する機会を狙っている。シュルス王の妹姫が帝国の皇帝に嫁ぎ、縁戚関係を結んではいるものの、アルディアは常に帝国の脅威におびやかされているのだ。ことあるごとに口出しをしてくる帝国が、アルディアを狙っているのはもはや疑いようのない事実である。

もし、帝国軍が襲ってくるようなことがあれば、そのときはアル

ディアも終わりだ。誰もがそう考えている。そうはあってほしくないと望みながらも、大佐自身も諦めているのだ。絶対になわなないと。

いずれ、帝国が大陸を制覇する日が来るだろう。その日はきっと、遠くない未来だ。

ライセルは愛馬にまたがる。月毛の馬は主人を背に乗せると、嬉しそうに鼻を鳴らした。

「じゃあ、行こうか」

隊列がゆっくりと進みだす。ライセルは左右の兵士を交互に見やっただ。どちらも同じくらい覇気のない顔つきだ。もし今、賊に襲われたとしたら剣を抜く前にやられてしまうだろう。戦う前から負けているようなものだ。ライセルは思った。だが、精神から腐りきった彼らに喝をいれようとは思えない。いれるだけ無駄だ。

まずは自分から始めなくてはならない。

婚約者の顔を思い浮かべる。ガザル帝国にこの国が侵略されるようなことがあれば、そのときには間違いなく彼女も殺されてしまうだろう。それは絶対にあつてはならないことだ。

ライセルは手綱をつよく握りしめた。体のどこかで、得体のしれない炎が燃えたぎっている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4133i/>

シルフローゼの赤い旗

2011年1月19日02時47分発行